

町民C、勇者様に拉致される番外編

登場人物 紹介

本来の姿

黒髪と蒼い目をしている。

本来の姿

薄茶色の髪と
緑の目をしている。

▲勇者

一年前、魔王を倒して
世界を救った深蒼の勇者。
その後は、町民Cと二人で
旅をしている。無口で無表情。

▲町民C

ごく平凡な一庶民だったが
「神子」として勇者の旅に同行した。
脳内ツッコミが得意。変装のため、
目と髪の色を勇者と交換している。

▼神官

星都の神殿の大神官。
一年前までは、
町民Cたちとともに
旅をしていた。

▲星原樹

かつて世界を管理して
いた樹。町民Cは、
もともとその一枝だった。

◀マチルダ

エレクトラムの長女。
鎧と剣を装備している。
キリリとした美人。

◀フェアフィール

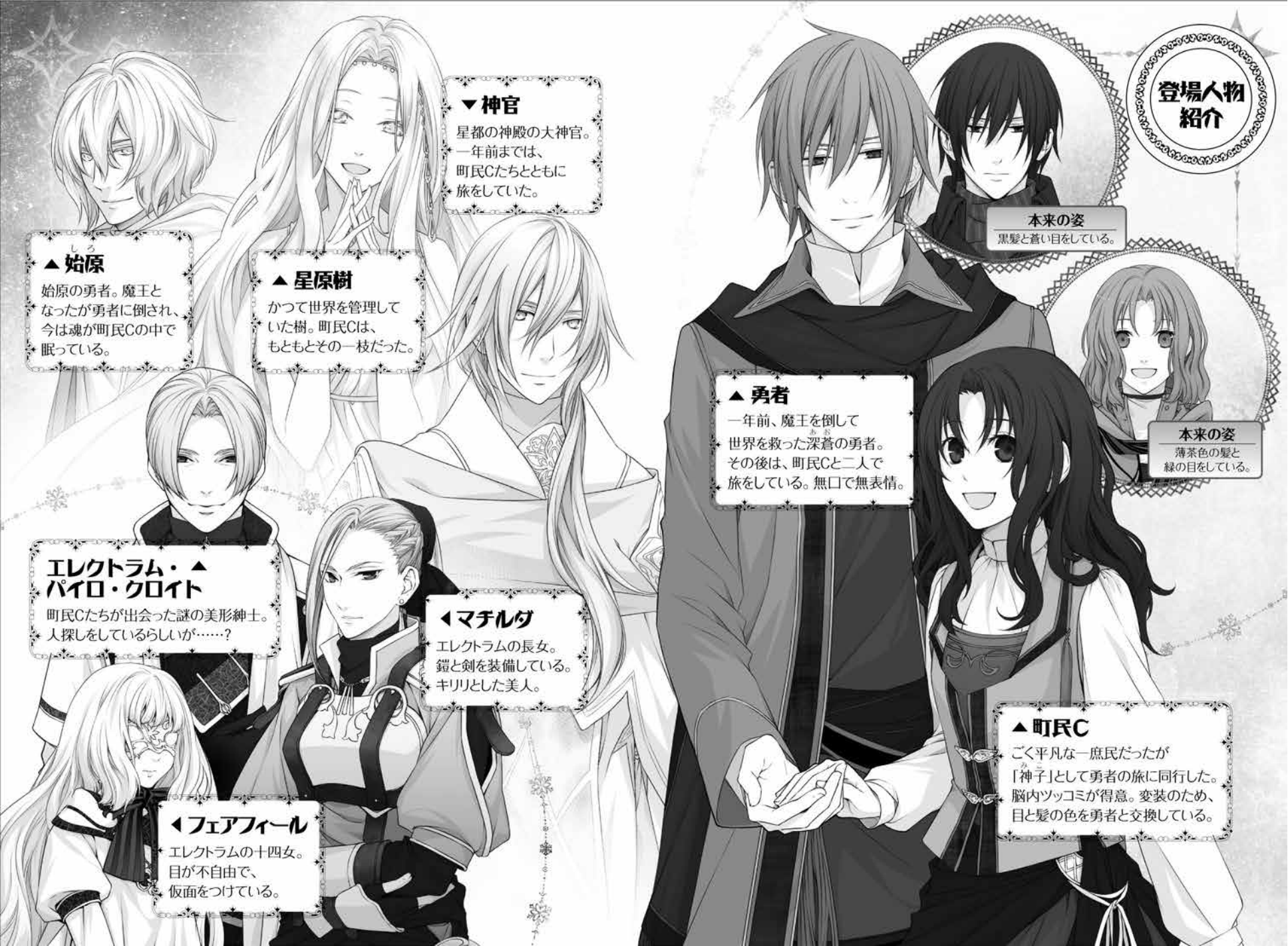
エレクトラムの十四女。
目が不自由で、
仮面をつけている。

▲始原

始原の勇者。魔王と
なったが勇者に倒され、
今は魂が町民Cの中で
眠っている。

エレクトラム・▲ パイロ・クロイト

町民Cたちが出会った謎の美形紳士。
人探しをしているらしいが……？



目次

町民C、勇者様に拉致される番外編

エピソード

271 7

町民C、勇者様に拉致される番外編

0 プロローグ 勇者と神子の物語

神子の薄茶色の髪は、彼女が少し動いただけでふわふわと背中揺れます。強い光を受けて、一本が金色の糸のように煌めいていました。

「待ってください、勇者様！」

神子は歩き去ろうとする蒼い鎧の男性——勇者に追いつき、その胸に飛び込みました。彼女の目に浮かぶ涙が、儂くきらりと輝きます。それは長いまつ毛から滑り落ち、白い頬を伝いました。わななく唇を引き締め、勇者の瞳をひたむきに見つめて心からの言葉を贈ります。

「愛しています、勇者様」

その声は、溢れる思いに揺れていました。

勇者は動揺を露わにし、すがる彼女から離れようとしていました。けれど神子はひしと抱きつき、さらに言葉を重ねます。

「愛しています。……お願いですから、絶対に生きて帰ってきてください」

神子ははらはらと涙をこぼしました。震える彼女の手には、勇者が自分のそれを重ねます。

夜のバルコニーには他に誰もおらず、二人だけが世界に存在しているかのようでした。

「神子様……」

静かな空間に、その勇者の声は切なげに響きます。お互いの吐息が頬に触れるくらいの近さで熱い眼差しを交わす二人。神子はなおも愛の言葉を囁きます。

「約束してください、勇者様。そうでなければ私は……」

けれど、その言葉が勇者の心に届くことはありませんでした。彼は首を振って、彼女の懇願を拒否したのです。

「……できません。貴女は、選ばれし神の娘。私たちは結ばれてはいけません」

「そんな！ 私は……それでも……勇者様を……」

勇者は、そつと神子の肩を押し、彼女の顔を両手で包み込みました。その両目からはまだ宝石のような涙がこぼれ落ちており、勇者が指で拭いても、止まることはありませんでした。

「そのかわり、貴女が生きる世界を守ってみせます。だから、どうか笑っていてください」

そう言って切なそうに微笑んだ後、勇者は蒼い瞳を伏せ、表情が陰ります。

黒髪がさらりと落ちて目元を覆い隠しましたが、逆に見えないからこそ、彼の苦悩がより深く見えました。

「勇者様……」

愛し合う二人はひしと抱き合って、そのまま唇を重ねます。

そして夜の闇が、二人をそつと隠すように深くなるのでした。

……って。

うわあああああああ！

キスしてましたよねっ！ フリじゃないですよね！

最近の劇はそこまでするんですか？ 本当にしちゃうなんて、すごいですね！ 初めて見た！
私はドキドキしながら舞台を凝視しています。

うう、観ているこっちの方が恥ずかしいよ。

周りの女の人たちは、うつとりして溜息をついています。恋愛小説でよくありそうな展開ですけど、こう目の前で、しかも役者さんがしていると、破壊力が違いますね！

舞台の上では今も、「神子様」と「勇者様」がラブシーンを繰り広げています。

またキスしたあああ！ 二回……三回目かつ。キスの先まであつたら、私の心が持ちそうにないです。素敵な劇だとは思いますが、何かと、いたたまれません。

その……私、そろそろ限界です。さつきから、恥ずかしいのや笑いたいのや泣きたいのを我慢しているんです。おかげで顔はひきつってるし、お腹は痛いし、変な汗は出るしで、なんだかもうめちゃくちゃです。劇を観ているだけなのに、ものすごく体力を消耗しています！

私たちがいる座席の灯りは絞られています。真つ暗じゃありません。私は恐る恐る、横にいる人——勇者様をちらりと見上げました。するといつも通りの無表情で、舞台を眺めていました。

さすがです！ まあ、この程度じゃ勇者様は揺るぎませんよね。動揺しているのは私だけだったようです。

舞台に目を戻すと、まだ役者さんたちはひと抱き合っていました。うっ……

こんにちは、一年前まで神子をしていました、町民Cです。

ついでに元・世界の管理者こと星原樹で、現・世界樹です。今は世界の管理者をやめて、ただの樹になっています。さらに言えば、本体は樹なのですが、人間の姿をしています。いろいろと複雑な経緯がありますが、とりあえず今はただの町民ですよ。あ、旅をしているから町民というより旅人かもしれないけど。

昔は神子として星神様とお話するために、頭の中でしゃべっていました。その星神様が眠りに就かれてしまったので、本当はもうこんな風に頭の中でしゃべる必要はないのです。けど、長年の癖はなかなか抜けません。他の人にはわからないからいいよね！

世界が滅びかけて、それでも何とかなっから一年。

私と勇者様は、今も旅を続けています。

今日はこの国で一番だと評判の劇を、本物の勇者様と観に来ています。といっても勇者様は亡くなったことになっているし、今は一般人として生活していますから、誰も気がついていません。当然、私たちはこの舞台の制作に全く関わっていませんよ。

舞台の上の神子は、確実に一年前の私がモデルです。同じく勇者も、横にいる人がモデルなんです。だからこそ、観ているだけで辛いんですよお！ ここに座っているだけで、さつきから叫び

出したい衝動と戦っています。娯楽であるはずの演劇に、まさか耐久力を試されるとは思いませんでした。やっぱりこんな劇観るんじゃないかな！

舞台の上ではやっと場面が変わりました。

勇者と神子がお別れるシーン、やたら長かった気がしますけど……そう思ったのは私だけでしょうか？

低い爆発音が連続で響きます。効果音だつてわかっていても、びくつとしちゃいました。

勇者様が私を見たので、大丈夫ですつて目で返事をしました。通じてますよね？

目の前では、魔王と勇者の戦いが繰り広げられています。魔王である竜は、精巧で巨大なハリボテでした。尾っぽや羽が動いています。勇者がその体を、輝く剣で何度も斬りつけました。演出のために星術を使っているのかな？ 炎とか、すごい迫力です。

私は体の力を抜きました。まだ、このシーンの方がさつきより耐えられますよ。何と言っても、恥ずかしくないのでから。

「滅びよ魔王！」

舞台の上の勇者が叫びます。絶対、本物はそんなこと言いません。思わず笑いそうになりますが、その本物が横にいたので我慢します。うう、お腹が引きつるよ。けどこんなシリアスなシーンで笑うとかどう考えても不審人物ですし、やっぱり必死で我慢するしかないんですつ。

私は口を押さえながら、劇の行く末を見守ります。口を押さえて震えてたら、感動で震えてるっぽく見えませんか？ そうでもない？

……まあ、実際の戦いとか離れているからこそ、笑っていられるんですが。ちらりと、本当の勇者様と魔王の戦いを思い出しました。あの時の炎と荒野が脳裏に浮かびます。けれど胸が痛み出す前に、心の奥深くに沈めました。

「ギャアアアアアア！」

竜が断末魔の悲鳴を上げます。

荒く息を吐きながら立ち尽くす勇者。すべての力を出し切ったのか、彼は糸が切れた操り人形のように崩れ落ちました。相打ちになったのです。

そこに、神子が駆けつけました。涙を浮かべた必死な表情で、勇者に取りすがります。

しかし神子役のお姉さん、女優さんだけあってすごい美人です！ 本物の神子とかぶるところなんて、髪の色ぐらいだよ！ 特に、胸はかぶってません。あんな、たわなに実ってませんから……遠い目で見守る中、劇は感動のクライマックスシーンを迎えます。

神子は勇者を喪つたことと、世界中でたくさんの人が亡くなったことを嘆きました。

そして、神様に呼びかけます。星術の代わりに、歌で表現されていました。動かない勇者の頭を膝に乗せ、朗々と歌い上げられる歌は、観る人の心を打ちます。

すると神様が愛する娘の声に応え、地上に顕現しました。といつても役者さんが演じてるんじゃないで、白い布を何かにかぶせ、ぼやつとした人影のように見える小道具で表現されています。そして、神子は神様と交渉し、自分の命と引き換えに亡くなった人々をよみがえらせました。

よみがえった勇者が起き上がり、動かない彼女を見て深く嘆き悲しみます。

それを知った神様が、星空の彼方への道を開きました。

死んだ者たちが向かうその場所へ、勇者は神子を抱き上げて歩いていきます。その途中で、神子が起き上がりました。彼女は生き返ったはずの勇者と死者である自分が一緒にいることに、驚きます。

「勇者様、なぜ生きてくださらなかったの？」

「貴女と離れることなど、考えられません」

そう言つて、勇者は神子を掻き抱きます。

「やっとな私も貴女に言うことができます」

ついに彼は、ずつと言えなかつた言葉を告げました。

「愛しています、神子様」

「勇者様！」

神子が、涙をばらはらとこぼしながら微笑みます。それは、まさに輝くような笑顔でした。

「……ずつと二人で……」

二人はそつと腕をからませて、舞台中央の花畑に横たわります。

……つて、いつの間に花畑がつ。それどこですか！ 突つ込みたい！ でも突つ込めない！

私は口を押さえたまま、ふるふる震えます。

「永遠に、一緒に……」

そうして舞台の幕がすると下り、劇は終わったのでした。

感動した女性たちのすすり泣きが、そこかしこから聞こえます。ぱらぱらと始まった拍手はすぐに耳が痛くなるほど大きくなって、歓声とともに劇場を満たしました。カーテンコールです。

やがて役者さんたちが舞台袖から出て来ます。すると、劇場はものすごい盛り上がりとなりました。

役者さんたちの輝くような笑顔を見ながら、私もとりあえず拍手をします。

……みんなと一緒に、普通に楽しんで、感動したかった！ でも、当事者としては感動できませんでしたっ。

なんで勇者様、平然としていられるんですか！ あなたも設定とかいろいろねつ造されてたのにっ。なんか爽やかな好青年にされてましたし……いや、よそいきの勇者スマイルを装備してる時は、あんな感じだったかもしれませんが。

そういうえば劇には神官様、というか大神官様が出てきませんでした。重要な役どころだと思うんですが、なんでかな。男の人であれだけの美人の役をできる人がいないとか？

私は頭をからっぽにして、ひたすら拍手を続けます。そろそろ手が痛くなってきました。

……周りってテンションが違うのは許してください。

この劇は絶対に一度観ておくべきだつて、昨日泊まった宿の受付のお姉さんが大ブッシュしていったよね。今日で街を離れるので、記念に観ておこうと思つたのです。

ここの街はちゃんとした劇場があつて、演劇が盛んなのだそうです。確かに役者さんの演技は上手でしたし、効果音とかもすごかつた！ 本当に爆発したのかと思ひましたよ。

劇といえば流しの劇団が屋外に建てた簡易舞台で興行していることが多い中、これだけ立派な劇場は珍しいので、街の名物になっていっているらしいです。

お姉さんがあまりに薦めるので、気になって来てみたけれど……観るんじゃないかな！ものすごく突っ込みたいのを我慢したり、噴き出しそうなのをこらえたり、トリハダを立てたりと、心が全く穏やかではない時間を過ごしましたよ。

一刻も早く外に出たいところですが、出口の方から興奮した声が聞こえます。何かあるのかな？ともかく、今は混雑しているみたいでした。

「時間を置いた方がいいですかね？」

そう勇者様に聞くと、「ああ」と短い答えが返ってきました。

なので私は、ひとまず心を落ち着けるために大きく深呼吸します。

うう……皆が号泣しているシーンで一人爆笑するわけにはいかないから、必死に耐えました。

だって勇者役の人が、甘いセリフを連発するんだもの！

本物を知っているから、違和感が半端なかつたですよ！泣きはしませんでした、涙目にはなりました。主に、笑いをこらえて。

「そろそろ出るか」

勇者様に声をかけられて周りを見回すと、ほとんどの席が空いていました。出口の混雑も、解消しているようです。私たちも席を立ち、出口に向かいました。

暗いところにいたので、ロビーに出るとかなり明るく感じます。ロビーには、人ばかりができて

いました。見ると、役者さんたちがお客さんをお見送りしています。このせいで、みんな出口にたまっていたんですね！

舞台の上で映えるように、役者さんのお化粧は濃いめにするものなんだった。近くで見たら、神子役のお姉さんは濃いめのお化粧をしていました。

人垣をかき分けて劇場の外に出ると、すっかりお昼の空になっていました。劇場に入ったのは、朝でしたよ。私はどれだけの時間、忍耐力を試されていたんだろう。遠い目になります。

明るい日差しの下で、隣を歩く勇者様の顔を見上げました。

「もうお昼ですね」

「そうだな」

頷く勇者様の髪は薄茶色。瞳の色は緑色です。

本当はさっきの役者さんと同じ、黒い髪と蒼い瞳です。けれど勇者様は死んだことになっているから、変装のために星術で色を変えているのです。

それは私も同じ。世間では、神子は神様と眠りに就いたと思われています。そのため、私は薄茶だった髪をあまり似合わない黒髪に、緑色だった瞳を蒼色に変化させています。

つまり私と勇者様は、お互いの髪と瞳の色を交換したような形になっています。

術をかけてくださったのは神官様です。大神官様って言った方がいいのかな、ともかく世界で一番星術に長けている人の術だから、簡単には解けないし、ごく自然に見えるのです。

なんで髪と目の色を逆にしたのか神官様に聞いたら、「考えるのが面倒でした」って素敵な笑顔

で返されました。それに、後々その方が何かと便利だろうからって。神官様のおっしゃることは、たまに謎です。

劇場から離れて、私もようやく少し落ち着きました。でも気は抜けません。ちよつとでも気をゆるめると、爆笑しそうで恐ろしいです。破壊力、半端じゃありませんでしたから！

「なんか……すごかったですね。いろいろと」

「そうか」

勇者様の相槌は、同意なのか疑問形なのか、抑揚がなさすぎてわかりませんでした。

とりあえず話は聞いてくれていたみたいなので、私は勝手に続けます。

「でも、なんで神官様は出てこなかったんでしょね？」

実際は神子が一人で神様を呼んだのではなく、神官様が神様を降ろすのを手伝ってくださいなんです。そのせいで、神官様は髪の毛と目の色をなくしちゃって、今はどちらも真っ白になっちゃっていますし。

勇者様は元々その神官様と旅をしていて、そこに神子を加えた三人で行動していたのです。それは広く知れ渡っていることなのですが……

「さすがに星教の最高権力者を、劇に出すのはまずいだろう」

勇者様は、さらりと教えてくださいました。

「そっぴやそっぴやだった！」

神官様は、星神様を祀る星教の最高権力者です。前はずっと一緒に行動していたから、あまりそ

んな認識はないんですが。王様の前でも膝を折らなくて大丈夫な身分の方なんですよね。

確かにそんなお方を恋愛劇なんかに出しちゃったら、何かとまずいよね。私にもさすがにわかりますよ。

納得したので、私は話題を変えました。

「ものすごいラブラブでしたね！ どうしてあんなことになっちゃってるんでしょうか」

「……もともと、そういう噂が流れていたからな」

へ？ と首を傾げて見上げると、勇者様も同じように首を傾げます。

知らなかったのか？ みたいな反応ですよ。もちろん私は知りません。兄妹疑惑があったのは知っていますけど。

「どんな噂ですか？」

「いろいろ種類があったが」

いろいろというあたりに、不安を覚えます。さっきあんな劇を観た後だから、余計気になりますよ！

「えっと……詳しく教えてもらってもいいですか？」

そうお願いすると、勇者様はしばらく考えた後、口を開きました。

「神子と勇者は恋仲だった。まずこれが基本だ」

「基本ですか！」

それが基本だなんて、そこから先、どんな風に広がっているのか考えただけで恐ろしいです！

一番の問題は、その基本からして事実無根というところですねっ。

「そこから派生する形で、噂が増えていった。兄妹説、駆落ちしてきた説、神子がどこかの国の姫だった説。略奪愛説に心中説、勇者による監禁説」

さらっと言いましたけど、ヘビーなものが混じっている気がするんですが！

もっと知りたいか？ と目で問いかけてくる勇者様に、私は引きつった笑顔で「もうお腹いっぱいです」とお断りしました。多分、それらの噂を勇者様に教えたのは神官様ですね。勇者様が自らそんな噂を仕入れるとは思えません。

とにかく、勇者と神子が恋仲だったというのは定説のようです。その結果がああ舞台！ 乙女の夢が詰まっています。当事者じゃなかったら、素敵って思えたでしょうか……

「行くぞ」

「あ、はい」

勇者様が、私に手を差し出してくれます。私はその手に自分の手を重ねて、ふんわりと握り込みました。

いつも、人が多いところでは手を繋いで歩いています。といっても、本当に恋人とかじゃなくて、保護者と子供の関係ではないんですが。

今日も、あつたかくていい天気です。

「神子役の人、ものすごい美人でしたよね」

その上、舞台に立つと魔法がかかるのか、すごくキラキラして見えましたとも。そうですね、

だいたい神子って聞いたら、美人さんを思い浮かべますよね。でも残念！ 正体は私でしたっ。

「世間一般のイメージは、あんな感じなんでしょうか」

もし神子が本当にキラキラ美人だったら、勇者様との恋物語も現実にありえたかな？

……勇者様がさっきの劇みたいなセリフを口にするとか、いささか想像を絶する感じですが。

ぼんやり想像していると、勇者様がぼつんと口にしました。

「俺は、お前でよかったと思う」

「……あ、ありがとうございます」

慰めてくれたのかな。私はお礼を言っつて、空を見上げました。

星霊さんたちが、のんびりと漂っています。

星霊さんっていうのは、かつて世界を管理していた世界樹がその座を降りた時に、神様が代理として任命された方々です。元は生きている人間だったけれど、今は魂だけとなって、世界を保つお仕事をしています。意外なことに、勇者様にも見えないらしいです。勇者様も、普通の人には見えないものを見る力があるようですが、それとは別の話なんだって。

そんな幽霊に近い存在なので、普通の人には見えません。たまに見える人もいるみたいだけど。

私は空に向かってこつそり手を振りました。星霊さんたちは世界樹である私に好意的なので、手を振り返してくれます。管理者の座を降りても、世界樹は存在しているだけで世界を調律するのに役立っているからかな。

「お母さん、お空を飛んでいるひとがいる！」

隣を歩いていた男の子が空を指します。が、お母さんには見えないみたいで、しきりに首をひねっていました。

星霊さんたちが、にっこり笑って男の子に手を振ります。男の子も、楽しそうに手を振り返していました。

「噂の中には、神殿が流したものもあるそうだ」

その言葉で、視線を男の子から勇者様に戻しました。さっきのお話の続きのようです。

「神殿が？」

「ああ。先程の劇のように、事実と一部変えた話を意図的に流布している」

「つまり、わざと嘘の話を流してるんですか？」

勇者様は頷きました。

私たちがのんきに旅ができているのも、神殿に残った神官様がそんな風に発表してくださったからとのことですよ。

どうりで勇者様生存説とか聞かないなーって思っていたら……さすが神官様、抜かりがありません！

お昼ごはんとして軽食を購入した後、すこしだけ街を散歩しました。

そのまま街の外れにある、乗合馬車の駅に向かいます。普段は歩いて旅しているんですが、珍しく乗合馬車があると聞いて、利用することにしたのでした。

魔物がいた頃は、そんなのはなかったんだって。平和になったことを実感して、ちらっと勇者様

を見ました。一番頑張った人なんだから、もつとのんびり過ごしてほしいな。時折そう思います。

昼過ぎに出発するというので、朝、宿を出てから時間がすぐ空いていたんだよね。そこで、時間つぶしの意味もあつて観劇していたのでした。いらないダメージを受けちゃったけど。

駅に着くと、馬車はもう用意されていました。馬車をひく陸馬さんは二頭。相変わらず野性を見失ったようなピンクと紫色の陸馬さんです。もふもふしてみたいけれど、ぐっと我慢します。結構大きい馬車だけど、二頭だけで引けるのかな。

珍しくていろいろ見ていたら、駅員さんらしき人に声をかけられました。

「乗るかい？」

「はい」

発車までまだ時間があるみたいだけれど、代金をお支払いして乗り込みます。中は薄暗くて、板張りの床に、箱のような椅子が備え付けられています。椅子の中には毛布が入っていて、自由に使つていいそうです。料金を払った時に教えてもらいました。

すでに何人かの人が乗っていました。軽食を広げている人もいます。私と勇者様は、端っこの席に二人で座りました。

私は早速、先程買った軽食を口にします。馬車酔いはしないと思うのですが、お腹がすいてると酔いやすいですし、食べるなら馬車が動き出す前に食べなければ。

薄焼きの生地に、みずみずしい葉っぱと薄切りのハムをくるくる巻いた食べ物でした。ちよつとつけてあったソースは、口当たりはまるやかなんだけど、あとからぴりつと辛さが来ます。おい

しいな。またこの街に来たら食べたいです。次来ても、もう劇は観ませんけどね！

あつという間に食べ終えてしまいました。が、発車まではまだまだのようです。

薄暗い中でぼんやり座っていると、周りの人の話が聞こえてきます。魔物が出なくて助かっているとか、この先の街でお祭りがあるとか。お祭りかあ。ちよつと気にはなるけど、うーん。あまり興味がなくて多くて、聞いているうちに眠くなっちゃいました。

「眠れ」

私の眠そうな様子に気がついて、勇者様が言いました。

お言葉に甘えて、私はそのまま眠りに落ちました。

——ちよつと待つて。

私が声をかけると、前を歩いていたお二人が鋭い動きで振り返ります。彼らの表情はとても厳しいものでした。

勇者様の灰色のローブの下にチラリと見えたのは、鮮やかな蒼色の鎧。

神官様のフードの端からは見慣れた銀色の髪が、一筋こぼれ落ちていきます。彼の金色の瞳が、すつと細められました。

反射的にビクツとしそうになったけれど、なぜか体の自由がききません。そこで、私は気づきました。

ああ、これは夢なんだなって。

そして、これはおそらく過去にあった出来事なのです。だから、ここで慌ても何も変わらないし、何も起きないんだよね。夢だとわかったら、ちよつとだけ落ち着きました。

こんな風に、星原樹だった頃の記憶を、よく夢に見ます。この間はちびつこの始原も見ましたよ。とても可愛かったので、愕然としました。

世界中の瘴気を集めて魔王となり、勇者様に倒された始原の勇者。一体どんな成長をとげたら、あんな風にいるいろねじれた感じになるんでしょうね！ とても不思議です。

ともかく先日の夢は置いといて、今見ている夢の話です。

お二人とも現在の姿と違うから、やっぱり過去の出来事のようにですね。

勇者様は、もう鎧は纏ってません。それに神官様も、今は銀髪じゃありません。彼らの顔からは、明らかに私を警戒していることがうかがえます。

怖い！ お二人のこんな顔、見たことないよ！ 見た途端、泣いて謝るレベルです。地面に這いつくばって、許してくださいって泣きますよ！

勇者様の手は、剣の柄にかけられています。

神官様は顔から警戒の色を消して、人当たりのよさそうな笑顔に戻りました。が、錫杖を持つ手には、結構力が入っているように見えます。

いつでも殴れる体勢ですね！ ずっと一緒にいたからわかります。ダメですよ、私を殴ったら、すぐにぐちゃちゃって潰れちゃいます。やわなんで、勘弁してくださいっ！

夢の中の私は背筋を伸ばして、お二人に正面から向き合いました。そして、自分の胸に手を当て

て話しかけます。

『この街から、この子を出すの？』

『この子、ですか？ 自分、ではなく』

神官様が怪訝けげんそうな顔で疑問を口にします。そりゃそうですよ。自分を指して「この子」だなんて、傍はたから見たらおかしな人っばいよ！

そういえば星原樹せいげんじゅの私しつて、妙に常識に欠けていた覚えがあります。よく始原しじろにも突っ込まれていましたよね。

そんな私の突っ込みが届くはずもなく、星原樹はそのまま話を続けました。

『うん、この子。星原樹への耐性は持っているけれど、それ以外は普通の子だよ。街を出ると危険が多いから、死んじやうかもしれない』

あくまで他人事のような口調だったので、神官様が重ねて問います。

『あなたは、その体の持ち主ではないのですか？』

『違うよ』

『どうして、我々が星原樹への耐性を持つ者を探していると知っているのですか？』

『あなたが神様に、お伺うかがいしていたでしょう？ それが聞こえたの』

その言葉で、勇者様と神官様の緊張感が高まります。そりゃあ星原樹なら聞かえてもおかしくないけど、どんどん不審さが増していますよおおお。

お二人が警戒を強めたのを感じ取って、星原樹は言葉を足しました。

『他の誰も知らないと思うから、安心して。私は特別だから。それに、こうしてこの子の口を借りるのも、最初に最後だと思おうし』

いろいろ事情を端折はしよりすぎだよ、星原樹わたし！

説明する方がややこしいと判断したのか、星原樹はそれ以上は何も言いませんでした。まあ、確かにこの時点で、私が星原樹の枝だつて言われても意味がわからなかっただろうけど。

神官様が、あからさまな疑いの眼差しを向けてます。

わかります、その気持ち。いきなりこんなこと言い出されたら、私でも疑いますよ！ 何をつて、その……大丈夫かって。頭の具合とかが……

お二人の不信感たつぶりの視線を受けて、星原樹はただだ不思議そうにしています。始原以外と話したことがないから、ちよつと会話が下手なのかもしれません。

『あ、そうだった。知らない人と話す時は、ちゃんとしなければいけないだよね』

星原樹がぼんと手を打ちながら、思い出したように言います。

今更遅いよ！ 突っ込みが追いつかないよ！

『えっと……。お願いしたいことがあるんです。聞いていただいでよろしいでしょうか？ かな』

明らかに使い慣れていない敬語で、星原樹は改まって言いました。最後の「かな」は余計ですが、『もし、この子を手を連れて行くなら、守ると約束できますか？』

星原樹は背筋をすつと伸ばしたまま、お二人をまつすぐに見つめて言います。すると、即座に返答がありました。

『約束する』

答えたのは神官様ではなく、勇者様でした。

ためらいのない答えを聞いて、神官様は溜息をつきました。ちよつと呆れているのかもしれない。神官様としては、星原樹と会話していろいろ確かめた上で答えたかったんだろうな。

その時ようやく、この夢がいつのこのなのかがわかりました。

私が、住んでいた街から初めて出た日の朝です。つまり勇者様たちとの旅の一日目、拉致された日の翌日です！

よく見れば周りの景色には、とても見覚えがありましたよ。今までお二人の険しい顔にビビって周りを見る余裕なんてなかったけど。

そういえば……街を出る時、気づいたら勇者様におんぶされていました。こうやって星原樹が無理やり私の意識を乗っ取ったから、体と心に負荷がかかって気絶したんだろうな。

今更ながら発覚する過去の事実！ 私の知らない会話はまだ続きます。

『……あなたは何者ですか？』

当たり前の問いを、神官様が投げかけます。

そうですよね、まずはそこに疑問を持つべきですよ。

『うーん』

星原樹は考え込みました。

『私はこの子と同じだけど違うもの。うまく言えなくてごめんなさい。でもあなたたちに会うこと

はもうないから、気にしないで。多分、この子の体はこれだけの負荷に耐えられないと思うから。

それに、この子も私のことは全然知らないよ』

なんともふわつとした返答です。気にするなって言われても、気になりますよ！

こうやって客観的に見ると、変なところが始原に似てますね。肝心なことを言わないところとか、何を考えているかさっぱりなところとか、とんでもなく不審なところとか！

星原樹は、勇者様に満面の笑みを向けました。

『約束してくれて、ありがとう。この子のこと、よろしくお願いします。【5/A0】』

星原樹の感情が、少しだけ伝わってきます。ほつとしたような、複雑な気持ちです。

この時、すでに神子の目は神様と繋がっていました。星原樹は神様に平和な人間のお見せしたかったから、私を危険なところに連れて行かせたくなかったんだよね。

今から思えば不自然なくらい、この街は魔物の被害が少なかったのです。

それは、私が無意識に瘴気を浄化していたためでした。逆に言えば、ここにいる限り私はある程度安全だったのです。

でも、勇者様たちは私のことを知ってしまいました。

そして星原樹は、瘴気が蔓延する世界の危険性を誰よりも知っていたから、お二人が瘴気を浄化できる私を連れ出すのを止められなかったんだろうな。

星原樹は約束したことで安心したのか、急に私との接続を切ってしまいました。

糸が切れた操り人形みたいに倒れ込む私を、勇者様が受け止めてくれたようです。微妙に、背中

と腰を支えられた感覚がありました。

勇者様ナイスキャッチ！ ありがとうございます！ おかげで顔面から倒れなくて済みました。顔面からは、さすがに乙女としてどうかと思いますしね！

夢は、そこでふつりと途切れました。

ゆっくり目を開くと、乗合馬車はまだガタゴトと走っていました。道に石が多いためか振動が大きくて、私は目を覚ましたと同時に背もたれに頭をぶつけます。痛い。

夢の中では夜明け前だったから、頭がうまく切り替わりません。いきなり昼の世界にポンと放り出されたような唐突さがありました。右のほつべたは、何やら硬くてあったかいものに触れています。状況を把握できないままボーっとしていると、至近距離から声をかけられました。

「起きたか」

「へ？」

声の方を見上げると、目の前に勇者様の顔がありました。

「ひゃー！」

近いいい！

なんと私は、勇者様の肩に思いっきりもたれかかっていたようです！ あったかくて硬かったのは、まさかの人体でした！

私は反射的に飛び起きます。あまりにビックリして心臓がバクバク言い、全身から変な汗がぶわっと噴き出します。

けれど、さすが勇者様。私の奇声にも全く動じません。相変わらずです！ 跳ね起きた私を、その緑の瞳で眺めています。

そう、今の勇者様の髪と目の色は、元は私のものです。夢の中で見た蒼い目と黒い髪の勇者様は、ここ一年ご無沙汰ですよ。こっちが現実！ あっちは夢！ いくら生々しくても、間違えるのはさすがにどうかと思います。

うう、まだ頭が切り替わっていません。

まだバクバク言っている心臓を押さえていると、私の肩から何かがずり落ちました。見れば、勇者様の外套です。さすがにこれは返さなきゃと、汚れをはたいて差し出しました。

すると勇者様は、それを座ったまま器用に身に着けます。そして横に置いていた手紙を手に取り、読み始めました。

あれ？ 勇者様あんな手紙持ってたっけ？ いつ受け取ったんでしょうか。というかこんなに揺れているのに、手紙なんて読んだら乗り物酔いしそうですが。

それにしても、大声を出さなくてよかった。乗合馬車の中は結構人がいますし、みんな疲れたように座っていますからね。

しかし、地味にお尻が痛いですよ。座席の下にあった毛布、あれ実はクッション代わりだったみたいで、みんなお尻の下に敷いています。私もやってみましたが、お尻の痛みは和らぎません。あ

とどれぐらいの道のりかな。

「疲れは取れたか？」

勇者様が、手紙から目を上げて私に聞きました。

「はい、大丈夫です！」

爆睡しちゃいましたからね。その上、変な夢まで見ちゃいましたけど。

「そうか」

手紙を懐ふくにしまいながら、勇者様が言います。

その横顔を見ながら、私は先程聞こえた乗客たちの会話を思い出しました。

——今は魔物に怯おびえずに旅ができるから、楽だねえ。

見知らぬおじさんが、しみじみとそう言っていたのです。

今はこんな風に馬車便が定期的に運行していますが、ちよつと前までは歩きか陸馬りくばさんでの旅が主流でしたからね。

世界が平和になつてから一年、勇者様と一緒にいろんなところへ行きました。

勇者様の行きたいところへ行きますよ、と言っているんですが、いつも私が行きたいところが目的地になつちやつてます。海馬うまさんを見に行くついでにうづいぶん前の約束とか、山に登つてみないってほろつと口にしたこととか、そういうのを勇者様はちゃんと覚えていてくれるんです。けれど本当にこれでいいのかなくて、たまに思いますよ。結構、面倒を見ていただいている気がするんです。いや、気がするじゃなくて、面倒を見ていただいていますよ！ まあ、前からですけ

ど！ そろそろ、自立を考えなきゃいけません。

ずつと一緒に旅をしてきたけれど、勇者様には勇者様の人生があるのだし、私の面倒ばかり見てもらわけないかと思うのです。

「どうした」

知らないうちに、勇者様をぼんやりと眺めてしまいました。私は慌てて言います。

「ぼんやりしていただけです！」

私の顔を少しだけ見つめてから、勇者様は納得したように頷うなずきました。

それを見て、私はあることに思い至ります。もしかすると……

さつき見た夢が、脳裏のうりによみがえりました。

『もし、この子を手連れて行くなら、守ると約束できますか？』

『約束する』

あの約束を、勇者様は今も守っていて、それで面倒を見てくれているのかな？

ボンと思いついたことだけど、わりと的を射あているような気がします！ 勇者様は、律儀を絵に描いたような人ですからね！

……とすると、ますます私は一人で生きていけるようにならなきゃいけません。このままでは、勇者様を一生束縛してしまいかねませんよ。

その時、馬車が大きい石に乗り上げでもしたのか、思いきり跳ね上がりました。「わっ」

思わず声を上げて椅子から転げ落ちそうになった私を、勇者様が支えてくれます。

「ありがとうございます」

お礼を言うと、勇者様の腕が離れました。

こんな風に助けてもらうことが、当たり前前になっています。

——独り立ち、かあ。

不意に現実味を帯びた単語をかみしめた時、胸の奥にもやっとしたものを感じました。なんでもない！ と握りこぶしを作って自分に活を入れます。

ふと顔を上げると、勇者様と思いつき目が合いました。

その目は、「大丈夫か？」と語っています。

見られたあああ！ だ、大丈夫です、大丈夫です！ 頭の方も大丈夫ですから！

もうおかしな行動はしない！ と心に誓いながら、私は足に力を入れて座り直しました。

1 紳士とお嬢さんたちに出会った話

あれから休憩を挟みつつ、馬車に揺られ続けました。お尻、痛すぎです！ 夜は比較的安全な草

原で野宿でした。晴れてて良かったです！ 隊商にくつついて旅した時もあったけど、あれとはまた違う感じで新鮮でしたよっ。

そうして先ほど、ようやく次の街にたどりつきました。

今回の目的地は、棒倒しで決めたのです。計画性も何もあつたものじゃありません。

次の目的地が決まらなかつたので、冗談半分でそのあたりにある棒を倒したら、こちらの方角を示したのです。そんなアバウトな決め方でいいのかなって思ってたけれど、勇者様がそれでいいって……：そういう私も勇者様も、たいがいアバウトに生きてきたんですから今更ですわね！

そうしてなんとなく決めた目的地でしたが、運がいいのか悪いのか、ちようど年に一度の大きなお祭りが始まる場所でした。明日からなんだそうです。馬車の中で誰かが言っていました。

しかも、昨年まで魔物との戦いで参加できなかつた人がこぞって参加するので、今年は例年になりました。それで、だから門がこんなに混んでるのかーって納得したんです。後ろの人が興奮しながら話していました。

けれど一步街に入った途端、この人ごみを見て呆然ですよ！ 予想をはるかに超えていましたから！ どっからこんなに人が湧わいてくるんですかっ。

目を回していると、勇者様が私の手を取って歩き始めました。

勇者様は人ごみを不思議なほどすいすい通り抜けています。人の流れを見切っているんですよね！ その技を教えてほしいです。私一人だと、人の流れに乗ってまっすぐ進むことはできても、曲がりたくても曲がれずにそのまま流されちゃいますよ。

人ごみをすり抜けた後、何件か宿屋をあたってみたんですが、あいにくどこも満室でした。街をぐるりと囲んでいる壁の外に隊商がテントを張って野営していたので、そうかなーとは思っていたんですよね。

噴水の近くでどうしようか考えていると、勇者様が屋台でジュースを買ってくれて、他の宿もあたってみるからここで待っているようにと言われてました。一緒についていくと主張したんですが、顔が疲れていると言われて、おとなしく荷物番をすることになったのです。

……実際、慣れない人ごみになり疲れてしまったみたいです。噴水のふちに座った途端、体がずーんって重くなりましたから。

もし宿が取れなかったら、必要な物だけ調達して次の街に行くしかないのかなあ。お祭りを見たい気持ちもちよつとあるんですが、あまりの人ごみに辟易しつつあります。人と人の間つてもうちよつとスペースが要ると思うんだつ。

「はあ……」

右を見ても、左を見ても人、人、人。

私は荷物をギュッと胸に抱き込んで、人の流れを眺めました。そして先程買ってもらったジュースを一口飲みます。

うっ！ 甘くなくて酸っぱいやつでした。でも人が多くて熱気がむんむんしているので、その酸っぱさが清涼感を与えてくれていい感じですよ。

もうちよつと何か買ってもらえばよかつたかな、と人ごみの向こうにちらちら見える屋台に目を

向けます。

——が。この人ごみを突破するのは、私には無理です！ とんでもなく厚い壁ですよつ。

これだけの人ごみを見たのつて、三人で旅していた頃の、歓迎パレード以来です。けれど、あの時は陸馬さんの上から見下ろしていたので、こんな人でぎゅうぎゅうのところを歩いたことはありません。いろいろな街へ行ききましたけど、星都の城下町とかは歩かなかつたし、こんな人ごみは初体験です。

人酔いつて、本当にするんですねつ。今、実感しています！ この胸やけに似た感覚が、人酔いなのでしよう。……多分。

私が腰かけている噴水は、街の中心にある広場のさらにど真ん中にあります。お花を投げ入れるとしあわせになれるとか好きな人と両想いになれるとか言われている噴水らしいです。看板にそう書いてありました。

そのせいか、赤やピンクの花で水面が覆われていて、一見、水が真っ赤に染まっているように見えます。近くに寄れば綺麗なんだけど、遠くから見たらちよつとしたホラーですよ！ 実際、私も最初はビビりましたからつ。

勇者様が宿を探しに行つて、どれくらい経つたかな？ 今日ば曇りなので、いまいちお日様の角度がわかりません。晴れてたら、影の向きでなんとなく時間がわかります。腹時計には自信があるんだけど、食事の時間以外はわかりません。なんとも使えない時計です。

暇だなあ。果汁も全部飲んでしまいました。果物自体が入れ物になっていたので、それもポリポ

りと食べちゃいました。上の方をパンと切ったらそのままジュースになる、素敵な果物らしいです。酸っぱいけど。

周囲には、屋台で買った軽食を食べる人や、私みたいに疲れ果てた様子の人が座り込んでいます。人間観察もいいんですが、あまりきよるきよるするのめどうかなと思って、視線を落としてポーツとしていました。

すると、目の前の地面に影が差しました。

勇者様が戻ってきたのかな、と勢いよく顔を上げたのですが……

「ねえ、暇そうにしてるけど、あっちで一緒に食事でもどう？」

服を着崩したお兄さんたちが、にやにやしながら私を見下ろしています。

えっ、誰ですか。

記憶力に自信がない私でも、全く知らない人たちだっってわかりますよ。

「人を待っているので、ご一緒できません」

結構はつきり言ったつもりだけど、お兄さんたちは聞いていない様子。

「ここは暑いしさ、あっちの涼しい方で楽しいことしよう？」

「怖がらなくていいからさあ」

いつの間にか、三人のお兄さんたちに囲まれているような……

「ほら、立ってさ」

一人のお兄さんが私の腕を掴んで、半ば強引に立たせようとしています。

「いや、結構です！」

ぶわっと変な汗が噴き出しましたよ！ これはマズイです。ここを離れたら確実に勇者様とはぐれますし、それ以前に、この人たちについて行くのは危険な気がします。腕を掴む手の力強さが、恐怖をおおります。

「ほら、お前の顔が怖いから怯えてるじゃんか」

「そんなことねーって。な、怖くないよなー」

いや、顔とかじゃなくて、全部怖いですから！

頭の中で突っ込みながら、もう一度断ろうと思って息を吸い込んだ時——横から声がかけられました。

「うちの子に何かご用事かな？」

お兄さんたちと私は、一斉に振り返ります。

そこにいたのは、柔らかな微笑みを浮かべた男性でした。年齢は、私のお父さんよりちよつと若いぐらいに見えます。

上質の服を、さらりとスマートに着こなしていました。金糸みたいなサラサラの髪に、深い蒼の瞳。整った顔は一見冷たそうだけれど、目じりにほんの少し笑いじわがあります。落ち着いた雰囲気醸し出していて、いかにも上品なたたずまいです。

これぞ紳士！ っていう感じの人ですよ。初めて見た！ 美形の人は年を重ねても渋味が出て、また違う魅力があるんですね！



目が合うと、笑いかけられました。うお！キラキラ笑顔ですよ。
でもその蒼い目に、不思議な既視感を覚えます。

あれ？ 知っている人だったかな？

「申し訳ないが、娘はこの後も予定が詰まっていますね」

紳士はそう言っ、わざとらしく広場の端に視線を流しました。

なんだろう、と見てみたら、警備隊の人がそちらにいます。私の手を掴んでいたお兄さんが、その手をぱっと離しました。

私は反射的に横にずれて、お兄さんから距離を取りました。まだ怖くて心臓がバクバク言っています。

「ちっ。連れが来たなら仕方ねえな」

「またな」

お兄さんたちは不満そうでしたが、適当なことを言っ、人ごみに消えていきました。

「あ、あの……」

お礼を言おうと思っ、見上げると、紳士がキラキラ笑顔で話しかけてきます。

「可愛らしいお嬢さん、どこかでお会いしたことはなかったかな？」

「へ？」

えっ、やっぱり知り合いですか？ ヤバイ。私、全く覚えてませんよ！

紳士を上から下まで眺めますが、どうしても思い出せません。でもたとえ知り合いだとしても、

神子時代の知り合いにはお会いしたくないんですが。もしそうだったら、即、逃げ出すつもりですが。

うーん。誰だろう。

唸りながら、もう一度足先からお顔まで眺めます。あ、靴がすごくきれいに磨かれてますね。紳士は足元も気を抜かない……前読んだ本に書いてありましたが、本当なんですね。感動します！

「……えっと……その……」

「思い出してくれたかな？」

考えても思い出せず困っていた時、紳士の後ろから呆れたような声が聞こえました。

「父上、また女性をナンパしているんですか？」

声の方に目を向けると、軽めの鎧をつけたすりとしたお姉さんと、線の細い女の子が立っています。

「おや、人聞きの悪い」

紳士がひよいと肩を竦めました。気障なはずの仕草も、妙にハマっています。

……って、ナンパですか？　これが初ナンパ？

というか、もしかするとさっきのお兄さんたちもナンパだったのですかっ！　衝撃です！　ナンパこわい！

お姉さんは、腰に剣を提げっていました。一見細そうに見えるけれど、足や腕には筋肉がしっかりついているのがわかります。動きやすそうなパンツ姿で、颯爽と近づいてきました。まどめられた

金色の髪は紳士と同じ色で目元も似ているので、本当に親子のようです。ただし、お姉さんの目は蒼ではなく淡い琥珀色。角度によっては金色にも見える、綺麗な色でした。

お姉さんに手を引かれた女の子は、色が白くて細い子でした。なぜか目隠しみたいな仮面をつけていますが、繊細な顔立ちをしているのがわかります。彼女はお姉さんよりも優しい色のふわふわした髪を、そのまま背中に流していました。これまたふんわりとした素材のワンピースを着ているのがお姉さんと対照的です。

「おとうさま、そこにどなたかいらっしゃるのですか？」

女の子が不思議そうに言います。仮面をつけているから見えないのかな。

とにかく、まずはさっきのお礼から、ですね！　知っている人なのかどうかは置いて。

「その……先程はありがとうございました」

「いやいや、気にしなくていいよ。困った時はお互い様だろう？」

紳士はそう言っ、茶目っ気たっぶりにウインクしました。本当にこんな仕草をする人がいるんですね。でも似合っているのがすごいです！

女の子は私がいる方に顔を向け、首を傾げていました。お姉さんも、じつと私の顔を見ています。……お姉さんの視線、わりと強い気がするんですが。ぼっちり目が合っ、私は思わず硬直してしまいます。

うわあん、勇者様いつ帰ってくるんですかー！　十中八九知らない人たちだとは思っけど、本当は知っているのに知らないとか言っっちゃったら、申し訳ないじゃないですかっ。

そんな私の困惑をよそに、紳士はいつの間にか私の手を取っていました。つて、本当にいつの間につ。全然気がつきませんでしたよっ！

「私はエレクトラム・パイロ・クロイトという者でね。こちらは長女のマチルダと、十四女のフェアフィールドだよ」

はじめまして、と女の子が小さな声で言って、お姉さんの後ろに隠れます。

え……十四女!? 私は思わず紳士を見上げました。

冗談でしょうか? いや、でも冗談言ってるっぽくはありません。

——はっ。驚きのあまり、口をぽかんと開けてしまいました。危ない危ない。そっと閉じます。

すると、お姉さんがまじめな顔で付け加えました。

「ちなみに、よく聞かれるので先に伝えておくが、腹違いを含めて、わかっているだけで十五人姉妹だ」

多すぎじゃないですかっ!? さらっと腹違いとか言ってるし!

愕然^{がく然}として紳士を見上げると、彼は照れたような顔で言います。

「でもみんな仲良しだよ。ありがたいことだね」

なんか思ってたのと違う言葉が飛び出してきました! ていうか、仲良しならそれでいいの? と思ったけど、お姉さんも妹さんも普通にしてるから、たぶんいいんだろうな。

まあ、この人はモテるだろうなーとは思いましたが、まさかそれほどは思いませんでした。警

戒心を解くのが上手で、マメな男がモテるのよって、前に誰かが力説していたことがあります。パ
ン屋で聞いたんだっけ? 実際、今も誰だか思い出せないけれど、さっきの怖いお兄さんたちと違
つて警戒心は起こりません。

「で、君は……」

と紳士が私の名前を聞こうとした時、横から声がかかけられます。

「失礼」

その耳になじんだ声を聞き、私は思わず跳ねるように立ち上がりました。

「お帰りなさい!」

勇者様です。彼は少し硬い表情で、私の横に立ちました。

あ、もしかしてこの人たちを警戒しているのでしょうか?

「お連れさんかな?」

「はいっ」

警戒はしていなかったけど、緊張はしていたみたいです。気づけば、私の手はかすかに震えてい
ました。なんとなく勇者様の外套^{がいと}の端を握ると、震えは収まります。

「……こちらは?」

勇者様は警戒の色を見せつつも、失礼にならないように私に聞いてきました。

「えっと、変な人たちからまれてたところを、助けてもらいました。で……」

やばい。私は人の名前を憶^{おぼ}えられないんです!

私の存在はちょっと特殊なので、名前を呼んでしまうと、その相手に良くない影響が出る可能性があるのです。だから、人の名前を聞いても無意識にスルーしてしまう癖があります。

その時私の焦りを悟ったのか、紳士が自ら名乗ってくれました。

本当に紳士ですね！ 輝いて見えますよ！

「連れが大変お世話になりました。ありがとうございます」

勇者様は、さつきよりも幾分穏やかな声でお礼を言います。顔は相変わらざる無表情ですが。

「この人出だからね。妙なのも結構混じっているから、用心しておいた方がいい」

紳士が周囲を見回しながら言いました。勇者様は静かに頷うなずきます。でも今回別行動をしていたのは、私が疲れていたせいなんです。だから、一応フォローしておきました。

「私が疲れてたから、先に宿を探しに行ってくれてたんです」

つまり勇者様が不用心だったわけではなくて、私の体力のなさが原因なのです……。要するに、自業自得ってやつですね！

「そのことだが」

言いにくそうに、勇者様が口を開きます。

「やはりどこも埋まっていた。必要な物だけ調達して、街を出ようと思うが」

「私はそれでいいです。じゃあ、すぐに出ましようか」

きつと何軒もあたってくれたんだらうな。座っていただけの私は、文句なんて言えませんよ！

「……君たちは、この祭りに参加しに来たのではないのかい？」

紳士が不思議そうに言いました。私たちは、逆に首をひねります。なんか含みのある感じですね。何も知らないのが顔に出ちゃったのか、紳士が笑いながら教えてくれました。

「ここの祭りは恋人探しの祭りとして有名なんだよ。恋人同士で参加して、絆きずなを深める祭りとしてもね。さっきの浮ついた若者たちも、それで君に声をかけたんだらう」

「そうなんですか」

「うん。だから、てつきり君たちもそうかと」

どうりで、若い人が妙に多いと思っただ。そして、デート中みたいな人たち、いちやいちやしている人たちがやけに多いと思っただ。

「君たちは違うのかい？」

「違う」

勇者様はきつぱりと否定しました。あまりに端的な答えだったので、私は一応補足します。

「その、親戚というか、異父母兄妹っていうかつ！ とにかく、ただの他人ですっ！」

慌てたような私の言葉に、紳士が的確に突っ込みます。

「親戚や異父母兄妹は、ただの他人じゃないんじゃないかな」

ですよー。

そう納得していると、腕にひんやりとした感触がありました。ビクッリして振り返ったら、女の子が私の腕に触れています。

いつの間に横に来たんですか!? ビビりますよ！

その時、なにかもやっとしたものが胸をよぎります。いきなり触れられたからって、もやっとすることはありませんよね。なんだろう。

「大丈夫」

女の子は、急にそんなことを言い出しました。

「どうやら私じゃなくて、お父さんやお姉さんに向けて言ったみたい。」

「フェアフィールが大丈夫だって言うなら、大丈夫かな」

紳士はそう言っただけで、私と勇者様を上から下まで眺めました。何かを考えているようです。

「ねえ君たち、急ぎの旅だろうか？」

突然聞かれたので、私は反射的に首を振ります。

「あつ、失敗したかも。正直に答えられない方がよかったかな。」

勇者様の顔をこわごわ見上げると、頭にボンと手が置かれました。気にするなっただけです。

「何か？」

勇者様が聞くと、紳士が答えます。

「宿を提供する代わりに、一つ頼みたいことがあってね」

「にっこりと笑う紳士は、信用できそうな雰囲気醸し出してました。」

「——が。」

本当に大丈夫でしょうか。私は自慢ではないですが、人を見る目がありません！ こういう時の判断は、勇者様に任せるに限ります！

「まあ詳しくは、食事でもしながら話すというのはどうだろうか？ その上で気に食わなければ、断ってもらって構わない」

「そうですね。お腹のすきっぷりから考えるに、そろそろお昼のようです。私の腹時計は、今日も元気に活動中ですよ！」

勇者様は一瞬思索し、私をちらりと見てから、

「わかった」

と承諾しました。

紳士に連れられてやって来たのは、ごちんまりとした食堂でした。裏通りにある、通好みっぽいお店です。

まだそれほど混んでおらず、すんなり席に着くことができました。

店名は、怨霊の囁き亭。……なんですか、このにじみ出る不吉感。内装はわりと普通なので、

不吉なのは店名だけだと思っていました。が、その考えは甘かったようです。

お昼のおすすりメニューは二つなんです——

「ど……毒魚の締め上げ煮溺死風か、嘆き鳥の涙スープですか……」

誰の趣味なんですか、このチャレンジ精神あふれる名称は！ もしかして、お店がすすりるのはそのせいなのか。

真剣に唸っていると、給仕のお姉さんがウフフと笑って言いました。